

会 員 通 信

追悼 相次ぐ重鎮の死を悼む

前日本微量元素学会理事長，厚労省（独）労働安全衛生総合研究所客員 荒川泰昭

日本微量元素学会の名誉会員，初代理事長ならびに第1回学術大会会長であり，本研究会の特別会員でもありました富田寛先生（日本大学医学部名誉教授）が平成26年7月5日に84歳にてご逝去され，そして相次いで日本微量元素学会の名誉会員，第19回学術大会会長であり，本研究会の顧問でもありました糸川嘉則先生（京都大学医学部名誉教授・前仁愛大学長）が平成26年8月31日に80歳にてご逝去されました。

日本微量元素学会におけるご縁を主に，第6代，第7代理事長として両先生方のご葬儀に参列させていただきましたが，昨年の野見山一生先生（創設者の一人，第2代理事長）のご逝去をはじめ，相次ぐ重鎮の死に直面し，1つの時代が消えゆく寂しさを感じざるを得ませんでした。



日本微量元素学会（京都）京都・祇園茶屋にて
左より政岡俊夫先生（麻布大学学長），木村修一先生（東北大農名誉教授），糸川嘉則先生（京大医名誉教授），Anke 教授（ドイツ），荒川泰昭（理事長），富田寛先生（日大医名誉教授・初代理事長）

富田寛先生とは、富田先生が会長、野見山一生先生が事務局長として開催した第2回国際微量元素医学会議（ISTERH, 東京）においてがん部門の座長を仰せつかり、招待講演のPrasadoなどの招待講演者を含めて親しくさせていただいたのが最初でした。そして、これを契機に、日本国内でそれまで個々に活動していた微量金属代謝研究会、微量元素研究会、輸液微量元素栄養学会の3つの学術集會が核となり、富田先生を初代理事長、初代会長として1990年に日本微量元素学会が設立されました。

富田寛先生は、「亜鉛欠乏による味覚障害の臨床」における草分けであり、権威でありました。また、長年の臨床現場のデータから、健常者の血清亜鉛下限値を80 $\mu\text{g}/\text{dl}$ とすることを提唱され、私が理事長の時代には日本微量元素学会においても策定委員会を設置し、先生の提唱される下限値設定を検討し、日本衛生検査所協会など臨床検査関連学会へ提案させていただきました。

富田先生とは主に日本微量元素学会を中心としたお付き合いでしたが、毎年のように、学会主催地の夜は「亜鉛の必要性」を唱える仲間（自ら亜鉛信仰教と称した）と共に、亜鉛を酒の肴にして熱く語り合っていました。

本葬でご遺族代表として挨拶された奥様の「主人は他人にやさしく自分に厳しい人でした」というお言葉に、先生のお人柄が偲ばれて、惜寂の感に堪えませんでした。

糸川嘉則先生とは、日本衛生学会をはじめ予防医学関連の学会や領域で常にご一緒させていただき、我々東大では毒性学を中心に、京大の糸川先生の方では栄養学を中心に、よりアカデミックに衛生学、予防医学をリードされておりました。とくに、先生は微量栄養学会やマグネシウム研究会の立ち上げなど、「微量元素の栄養学」分野において多大なる貢献をされました。

先生とは何か気の合う間柄で、私が主催する学会にはほとんど招待講演をお願いしておりました。また、京都で開かれる学会に出席した折は、決まって朝から「今晚、時間が空いていますか」、「今晚、時間を取っておいて下さい」と耳打ちされ、祇園あるいは先斗町でお座敷芸者を交えて歓談することたびたびでした。江戸ならぬ京都の粋や風流を心得た先生でしたが、サスペンダーのつりズボンというロカビリースタイルで現われることもしばしばでした。そのためか、先生の本葬でも芸者衆が焼香に来ており、さすが先生の葬儀だと感服した次第です。

独自の世界（ワールド）を開いたあるいは持った先達が次々と目の前から居なくなり、寂しさを痛感せざるを得ない昨今です。両先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

近畿亜鉛治療研究会に参加して

香川県立保健医療大学臨床検査学科 樋本尚志

私も亜鉛に魅せられている臨床医の一人であり、近畿亜鉛治療研究会には時々参加させていただいている。私は、「肝疾患における代謝異常に微量元素が果たす役割」について興味を持っており、診療を行う傍ら細々と研究を行ってきた。この研究会でも一度発表させていただいた事があるが、多くの先生方から質問をいただき、亜鉛治療に関する関心の高さを認識した。

この研究会では、様々な領域の先生が亜鉛に関するご自身の研究を発表され、その後の討論も大変熱がこもっており、研究会に出席する度に新たな知見を習得している。この研究会をオーガナイズされている宮田先生のご人脈の広さには、改めて圧倒される。このように、亜鉛の代謝や機能に興味を寄せている研究者や臨床医が一同に会してそれぞれの得意分野を紹介し、熱心に討論することは大変意義のある